



TITLE:

# マルクスの農業經濟觀其一自作農的小農業に関する見解

AUTHOR(S):

河田, 嗣郎

---

CITATION:

河田, 嗣郎. マルクスの農業經濟觀其一自作農的小農業に関する見解. 經濟論叢 1927, 24(6): 943-963

ISSUE DATE:

1927-06-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128551>

RIGHT:

# 會學濟經學大國帝都京 叢論濟經

號六第

卷四十二第

行發日一月六年二和昭

## 論叢

マルクスの農業經濟觀……………教授 法學博士 河田 嗣郎  
所得申告遺漏の補完方法……………教授 法學博士 神戶 正雄  
國家と社會……………助教授 法學士 作田 莊一

## 說苑

ブルゲン氏の諸社會主義評論……………教授 法學博士 田島 錦治  
産業としての林業の特性……………教授 經濟學士 平田 憲夫  
琉球の癘藩置縣……………教授 法學博士 山本美越乃

## 雜錄

津輕藩の武士歸農策……………教授 經濟學士 黑 正 巖  
統計に於ける二重計算……………教授 經濟學士 岡崎 文規  
銀行法と普通銀行の資本金……………助教授 法學士 沙見 三郎

## 法令

支拂猶豫ノ件・日本銀行特別融通及損失補償法・臺灣ノ金融機關ニ對スル資金融通ニ關スル法  
律・特別融通審査會規則・商工會議所法・計理士法・保稅倉庫法中改正・保稅工場法

## 附錄

本誌第二十四卷總目錄

# 經濟論叢

第二十四卷 第六號

(總發售四百四拾四號)

昭和二年六月發行

## 論叢

### マルクスの農業經濟觀

#### 其一 自作農的小農業に關する見解

河 田 嗣 郎

一

マルクスは農業經濟に就いて特に研究したといふわけではない。資本論其他に於て一般的に經濟理論を説くに當り折に觸れて農業經濟上の所見を明かにして居るに過ぎぬ。特にその理論方面に於てさうである。併し資本的蓄積の一般法則と所謂本來的蓄積とを説くに就いては、資本論中に資本的蓄積の一般法則の例示として英吉利の農業プロレタリアートに關する詳しき説明を爲し

又所謂本來的蓄積の過程の説明として農民に對する土地剝奪の有様を詳細に述べて居る。農業改革に關する見地は其一端を共產黨宣言中に窺ふことが出来る。私は資本論中諸所に散見する所と共產黨宣言に於て示されたる所とに據り、マルクスの農業經濟論を探つてみたいと思ふ。そして獨逸社會民主黨を中心勢力とする社會主義者の農政上の議論と方策とが、主としてマルクスの示した理論と見地とを基礎として居ることはいふ迄もない。

## 二

マルクスは餘剩價値の生産、その資本主階級による搾取、從て生ずる資本的蓄積等に關しては理論も過程も大體農業にも工業にも共通であつて、特に農業經濟上の理論として立てなければならぬものは無いと見て居るやうである。即ち同一の理論が一般的法則として諸多の産業方面に妥當するものと見て居るやうである。少くともマルクスは「農業に在つても工業に於けるが如く生産過程の資本制的變化は生産者の艱苦史として、勞働手段は勞働者の抑壓手段として搾取手段として又成貧手段として、勞働過程の社會的結合は勞働者の個人的なる活動と自由と獨立との組織的壓迫として表はれるものだ」と信じて居るのであつて、農業に於けると工業に於けると其間區別の認むべきものありとは考へて居らぬ。「都市の工業に於けるが如く現代の農業に於ても亦増加されたる生産力と勞働の増加されたる融通性とは、勞働力そのもの、荒廢と衰疲とに依て購は

1) K. Marx, Das Kapital, I. Bd. I. Aufl. S. 494; IV. Aufl. S. 470; Volksausgabe, S. 445

れるもので」然かも集合統一といふことが都市勞働者の抵抗力を増すに反して、農業勞働者が廣き面積の上に散在することは彼等の抵抗力を打破する所以である。<sup>2)</sup>

マルクスの觀る所では、農業に在つても亦工業に於けるが如く、資本本位的なる大規模生産は、漸次勞働本位的なる小規模生産を壓倒して、その生産者等の事業家としての獨立を失はしめ、彼等を驅つて無產勞働者階級に陥らしむるものと觀るのである。此の變化に依て舊社會の堡壘たる自作農民が打亡ばされ、それに代つて賃傭勞働者が表はれることは農業といふ領域内に於て最も革命的な働を爲すものだ<sup>3)</sup>と見て居る。斯くて農業にも資本的な大生産が營まれるやうになれば、「習慣に捕はれたる非合理的な經營に代つて科學の意識的にして技術的な應用が行はれることとなる。」<sup>4)</sup>即ち「農業と工業との幼稚にして未發達なる形態を纏ふて居る所の原始的な家族的紐帶の破壊は資本的な生産方法に依て成就されるのである。」<sup>5)</sup>けれども「此の資本的な生産方法は同時に又農業と工業との、新たなる、より高き結合の物質的條件をば兩者の對立的に造り成されたる形態の基礎の上に創り出すものである。」<sup>6)</sup>

斯くマルクスの觀る所では、現代農業も工業同様に資本主義的な新生産組織に依る新生産方法の爲に革命的な洗禮を受けざるを得ざるものであつて、然かも之が爲めに農民の多數は無產勞働者化せられ、其等賃傭勞働者は又資本主義的な搾取と抑壓を受けざるを得ざる境遇に置か

2) ibid.

3) ibid.

4) I. Bd. I. Aufl. S. 493ff.; IV. Aufl. S. 469; Volksausg. S. 444.

5) I. Bd. I. Aufl. S. 494.; IV. Aufl. S. 470; Volksausg. S. 445

6) ebenda

れるが、農業に取つて更に悲むべきことは、農業に於ける機械使用は、工業労働者に對して齎す種々の肉體的な不利益から大抵免れるものなるが爲に、機械は農業方面に於ては工業方面に於けるよりも労働者の過剰といふ事實を一層力強く又何等の抵抗なしに惹起するものなることこれである。そして其過剰となつた農業労働者等は、農業人口の相對的過剰といふ現象となり、一部分は外國に移住し一部分は都會に向つて流出することとなり、茲に又都會に於ける労働者の供給過剰といふ事實と之に伴ふ生活困難とを激成せざるを得ざることとなるのである。

## 三

マルクスの觀る所大體に於て先づ斯くの如きものなりとすれば、更に立入つて農業經濟と農民社會相とに關するその所見を叩いてみる爲めには、先づ自作農民に關する方面を、次に農業労働者に關する方面を叩くのが研究上便宜だと思はれる。

自作農業と自作農民との運命に關してはマルクスは前に述べたやうな結論を與へて居るのだが、茲に自作農といふのは主として所謂小農としての自作農であつて (Parzellenbauer) 他人の労働に依頼せず、自家の労働を以て之を耕作經營するを得るだけの小農地を所有し、然かもその一家勢力には多少の餘裕あるに、其の所得は一家生活に足らない所から、副業として多少の家内工業に携はり、若くは多少は他人の爲に賃傭労働にも従事しなければならぬやうな状態に在るもの

7) ebenda

8) I. Bd. I. Aufl. S. 493; IV. Aufl. S. 469; Volksausg. S. 444

9) I. Bd. I. Aufl. S. 629; IV. Aufl. S. 607ff.; Volksausg. S. 579ff.

をいふのである。その所有し經營する農地の大きさについてはマルクスは何所にも説いて居ないが右の如く解釋するを適當とするであらう。<sup>10)</sup>

此種の自作農民に在つては、土地は最も重要な生産要具としての働を爲すと同時に、又その所有者たる農民一家の勞働の爲される場所として缺ぐべからざるものである。<sup>11)</sup> 此點は彼の資本的な純企業を行ふ有期小作人が土地に對して有する關係と少からず趣を異にする所で、企業小作人に在つては其經營上資本の働く部分が小自作農民の經營に比し遙かに多大であるに加へて、資本は必ずしも之を農業に用ゐないでも他に幾らも之を用ゆべき道がある。確かに勞働よりも資本は融通性に富み移動性に富んで居る。従て小自作農民に在つては土地は企業小作人に於けるよりも經營上重要な地位を占める次第である。<sup>12)</sup>

斯かる小農地の所有は、其所有者の數が頗る多くて田舎人口は都會人口よりも遙かに多數なることを前提とし、然かも他の産業方面では資本主義的な生産方法が大いに發達せるに拘らず農業方面に於ては其發達大いに遅れ、又他の方面では資本的な集中が表はれて居るに拘らず農業方面では却つて其分散せる状態の存することを前提とするものである。そしてかゝる小自作農民の生産物は多くは直接に自家の消費に充てられ、たゞ其殘餘が商品として都市の市場に供給せらるゝに過ぎざるを例とする。<sup>13)</sup>

10) Dr. W. Cohnstaed, Die Agrarfrage in der deutschen Sozialdemokratie, 1904. S. 55ff.  
11) Das Kapital, III Bd. II. Theil, S. 338  
12) Cohnstaed, a. a. O. S. 56  
13) Das Kapital, III Bd. II. Theil, S. 338ff.

資本的小作人は普通の資本主同様に其用ゐる可變的資本も不變的資本も共に之を前貸的投資と見るものであつて、然かも彼等は出來得る限り可變的資本の使用を少くせんと努むるものである。<sup>14)</sup>然るに小自作農民は之に反して、長くして注意深き勞働に依て其の可變資本を高くせんと努め、其の可變資本こそは彼等の眞實の所得を爲すものと見る。あらゆる不變的資本は小自作農民に取つては勞働の機會を失はないが爲めの手段たり従て彼等自ら自らに賃金を支拂ひ得るが爲めの手段と見るに過ぎない。即ち或目的の爲めに存する手段と見るに過ぎない。<sup>15)</sup>

勿論此等の小自作農民といへども他の普通の勞働者同様に餘分勞働を爲すものである。即ちその勞働力を維持するに必要な所以上の勞働を爲すものである。此の餘分勞働は餘分な生産物として實現するもので、餘剩價值即ち利潤を生ずる。そして此の餘分生産物は、小自作農民の生産に在つても、他の産業方面に於て資本主義的な生産方法の發達して居る國では、其の一部分が他の生産方面との比較に於て餘剩利潤即ち地代として表はれるほど多大であり得る。<sup>16)</sup>

されば小自作農民に對する利己的利用の限界は彼が小資本主である限り資本の平均利潤でもなければ又彼が小地主である限り地代の必然性でもない。小資本主としての彼に對する絶對的な限界は實に勞働賃金である。彼が眞實の生産費を控除したる後に彼自身に支拂ひ得る所の勞賃に外ならないのである。従て彼れの生産せる所のものゝ價格が彼に此の賃金を保障する限りは彼は土

14) III. Bd. II. Theil, S. 229

15) Cohnstaed, a. a. O, S. 56

16) ibid. S. 57; Das Kapital III Bd. II. S. 338



地を耕作するを辭せない。そして屢々賃金が生存上の最低限度に低落するまで其仕事を繼續するのである。<sup>17)</sup>

何れにしても小自作農民はたゞ地代所得を目的とする所の單純なる地主たる資格を備へたものでもなければ、又資本の所有者として其の利子所得を大にすることを目的とするものでもない。彼は小面積の土地の所有者であり、小資本の所有者であるけれども、彼が農業を營む目的は、自己の土地を勞働の場所として其上に一家の獨立なる勞働を行ひ之に對して賃金所得を占むることに存する。そして時には地代に相當する餘分利得に與かることもあるけれども、時には又生活の最低必要を充すに足るだけの僅少な勞賃所得に甘んじて、農業經營を繼續するものである。そして彼の所得が地代と見るべき多少の餘分利得を擧ぐるに足るものとして表はれるか、それともたゞ僅かに生活を支持するに足るや足らずの最低賃金を齎らすに過ぎざるかは、主として天然の恩恵の厚薄に依て定まる所の收穫の多少と又彼自身の到底これを如何ともすることの出来ない生産物價格の高低とに依る。

「斯かる自作農民の自由なる小農地所有の形式は支配的な正常的形式として古クラシック時代の社會の經濟的基礎を爲して居たと同時に、近代の國民の中に在つては、封建的土地所有制の崩壞裡より表はれたる諸形式の一として之を見出すことが出来る」<sup>18)</sup>とマルクスは述べて居る。

17) III. Bd. II. Theil, S. 339 ff.

18) 19) III. Bd. II. Theil, S. 341

即ち「英吉利に於けるイオウマンリー、瑞典に於ける農民階級、佛蘭西及び西部獨逸の農民」<sup>19)</sup>これである。

そしてマルクスの見る所では、かゝる自作農民の自由なる所有制は、小規模經營に對する土地所有の最も正常的なる形式である。換言すれば、土地の所有といふことが勞働者自身の勞働の生産せる物に對する彼れの所有の條件を爲すやうな生産方法と、そして農業者が常に彼自身の生存手段をば自己躬ら獨立に又孤立せる勞働者として彼れの家族の人々と共に生産しなければならぬやうな生産方法に對する土地所有の最も正常的な形式である。此種の經營方法の十分なる發達の爲には、土地の所有といふことは、手工業の自由なる發達の爲に器具の所有が必要缺ぐべからざると同様に必要なことである。かゝる方面では其事は實に人格的な自由獨立の發達の基礎を爲す。それは又農業そのものの發達の爲めにも缺ぐべからざる過渡的狀態を爲す次第である。<sup>20)</sup>

併しそれと同時に、かゝる自作的小農地所有制は、其の性質上、勞働の社會的生産力の發展、勞働の社會的形成、資本の社會的集中、大規模なる牧畜、科學の累進的な應用といふが如き事柄をば排斥し除外するものである。<sup>21)</sup>

マルクスは右の如く信するものなるが故に、自作的小農地所有制は中世時代のやうに、手工業と相並んで小規模なる自家勞働的な又多分に自給經濟的な條を止めたる小農業には適した制度で

20) ibid.

21) do.

あり、又必要な制度であつたけれども、從て農業の發達上是非通過しなければならぬ階梯であつたけれども、それは現代から見れば要するに過去のことであつて、既に歴史の領域内に屬するものたるに外ならぬと觀る。かゝる小農地の自由所有制が、勞働の社會的な形成や資本の社會的な集中と相容れざる性質を有するものであり、大規模經營に適せず又科學の應用を十分ならしめざることは、社會の進歩と經濟一般の發達に伴つて、漸次に其存立の地盤を危くせられ、時代に取殘されて舊式な遺物となつてしまふ外はないと觀るのである。即ちマルクスの史觀の一般原則により、或時代に適當にして其時代に缺ぐべからざる制度も、生産方法の發達に伴ひ、時代が變化するに連れて、新時代には適せざるものとなつて、過去帳に記入せらるゝことゝならざるを得ざる次第である。自作農的小農地所有制のみが獨り其原則に漏れ其運命を免れる筈はなかつた。

#### 四

仍て少しく自作農制沒落の運命の跡を尋ねれば、「高利貸と税制とは此制度を艱窮に陥れねばならぬ。土地代價として多額の資本を投せなければならぬ結果地方開發の爲の資本は減少せられる。生産手段の際限なき分裂と生産者の個々分立と、人間精力の多大なる浪費と、生産諸條件の累進的劣化と生産手段の騰貴とは、すべて皆小自作農的所有制の必然的法則である」<sup>22)</sup>。

土地の自由所有制を伴ふ所の小農業に固有なる特殊の弱點と見るべきものは、農地の購入の爲に資本が要せられるといふ事實から生じて来る。右に示した所にもあるやうに此事の爲めに小農業者は地力を開發し利用する經營の方面に用ゆべき資本を殺がれ、其經營を十分集約的に行ふを得ざるに加へて、土地が賣買せられるといふ事實は土地を益々商品化せしめ漸次に動産的な性質を有するものたるに至らしめる。そして賣買移轉の行はれる毎に、又相續<sup>23)</sup>の爲される毎に、土地はいつも新たに資本の投下を繰返すことになる。そして土地を買取りたる者からいへば其代價及び其利子は之を生産經營上の費用と見る外はないから、土地代價は土地の上に行はれる生産による個々の生産物の生産費價格の出来るについての重要な要素となる。

然るに更に詳かにマルクスの説く所について見れば、土地の價格は資本に還元されたる地代に外ならないから、農業が資本主義的に經營せられ、地主はたゞ地代のみを所得し、小作人はこの年々の地代以外何物をも地主に支拂はないならば、地主が當該地を買取るに當つて支出した代金は彼に對しては明かに利子を産出する所の投資である。けれどもこれは農業それ自體の爲めに投用せられる資本とは何等の關係を有たない。農業の爲めに働く固定資本の一部分でもなければ流動資本の一部分でもない。土地の買主は其の賣主に對して土地代價を耳を揃へて拂ひ切つてしまふのであつて、賣主は代價を受取ると同時に當該地に對する所有を失ふことになる。されば此の

23) 獨逸では分割相續制の存する結果長子が他の兄弟姉妹の相續分たる土地を一纏めに相續せんとする場合には 彼等に對して其代價を辨償しなければならぬ。

代金額は買主の資本の一部分をば形造るわけではなく、彼は既にそれを支拂つてしまつて持つて居ないのだ。従てそれは買主が土地に對して何等かの方法で投下せる資本の中には屬せないのである。<sup>24)</sup>つまり斯くの如く土地代金は農業生産上に關係あり其爲に働を爲す所の資本には無關係のものであり乍ら、即ち農業の立場からいへば資本として存在せざるものであり乍ら、然かもそれは土地を所有せんが爲に土地所有者が前所有者に對して支拂つたものであるが故に、所有者から見れば、其業務上の費用と見られざるを得ざる次第で、従てそれは當該地の上に行はれる生産業に依て產出されたる個々の物の生産費中に加算せられざるを得ない。そしてそれだけ生産物の價格を高からしめ、其販賣を困難ならしめ、引いて其業務を行ふ自作農民の事業自體を困難ならしめざるを得ない。

所が小農地所有制に關しては、土地自身が價值を有ち従て資本として土地生産物の生産價格中に加算せらるべきこと恰も機械や原料やに於けると同様だとの異見が存して居る。然しマルクス學說に従へば、地代と従て其の資本化されたる地價とは、たゞ二つの場合に於てのみ土地生産物の價格を定むべく其中に入り得るものである。即ち一は眞實なる農業資本の結合の結果としての土地生産物の價格が其の生産價格以上に居り、そして市場の狀況が地主をして此の差額をば利得するを得せしむる場合である。その場合にいふ眞實の農業資本は土地の代價として支拂はれるも

のとは無關係なることいふ迄もない。二は獨占價格の存する場合である。然し此の兩場合は共に小農業と小農地所有とに於ては殆んど生じない。それは此等に於ては生産は大部分自家用の爲に行はれ一般的なる利潤率に依る制理を離れて行はれるからである。<sup>25)</sup>

されば土地の購入の爲にせられる債務資本の支出は決して農業資本の投下ではない。却つてそれは小農民が其の生産範圍内に於て之を用ゐ得る資本の減少を齎し、彼等の生産手段の範圍を狭くし従て再生産の經濟的基礎を狭小ならしめるものである。之が爲めに小農民は高利貸の餌にせられる。蓋し此方面に在ては一般的に眞實の信用の行はれることが少いからである。大農地經營に於て賣買の爲される場合ですらも、土地代金の支出は農業の防害である。<sup>26)</sup>

然るに悲いことには、自作農的小農地制の廣く存する所に在つては、土地の價格はいつでも比較的高きを例とする。それは土地が小面積つゝ賣買せられるから需要者の數が多くて其等の相互間の競争の結果地價を段々にせり上げるからである。従てかゝる小農地を買取つた者は其買取の爲に支拂つた資金に對して比較的低い利廻りの利子しか收取することが出来ない。然るに彼等が借用する抵當信用借金の債權者に對して支拂はねばならぬ利子は高利貸的に高きを常とするのである。<sup>27)</sup> この事情は小自作農業者の經營を頗る困難ならしむるものであつて、地價騰貴の結果終に其經營は不可能に終るにも至らしめる。<sup>28)</sup> 何れにしても小農業經營に在つては、土地所有制の形式

25) S. 344

26) S. 344ff.

27) S. 345

28) ditto.

たり又其結果たる土地價格は生産それ自身の制限となつて表はれるものである。尤も此事は大農業や資本的な經營方法の行はれる大農地所有制に於ても亦同様に制限として表はれるものである。蓋し後者に在つては小作人は彼自身の利益にはならないで結局地主の利益となる所の生産的投資に於て制限せられるからである。されば兩形式何れに於ても、共同的な永久の所有物としての土地の、又人間生々連鎖の欠ぐべからざる存在條件たるものたり再生産條件としての土地の、自覺的にして合理的なる取扱の代りに、地力の掠奪と濫用とが表はれる次第である。然かも小所有地制に在つては此事は勞働の社會的な生産力を使用すべき手段と智識との缺乏から産み出され、大所有地制に在つては小作人と所有者とを出來得る限り速かに富ます爲に此手段を掠奪的に使用することから表はれて來る。<sup>29)</sup>

斯くの如く土地が價格を有ち然かもそれが小農地ほど高價なることの爲に小農的自作農業の經營困難なる事情あるに加へて、マルクスは尙ほ此種の農民部類と其生産關係との内部的分解を見るものである。即ち自作農民は其所有小農地の上に多くの勞働を施すのであるが其勞働は甚だ效果薄きものたらざるを得ない。何せなれば其勞働は孤立したものであつて、生産力の客觀的な社會的な然かも又物質的な條件を缺いたものだからである。<sup>30)</sup>即ち前にも述べたやうにマルクスの觀る所では、自作農的な經濟は習慣に捕はれ不合理的な經營に外ならない。<sup>31)</sup>

29) S. 346ff.

30) S. 216

31) I. Bd. I. Aufl. S. 494; IV. Aufl. S. 470; Volksausg. S. 445

然れども要するに小所有地制に對する批評は結局は農業に對する制限となり妨礙となる所の私有制度に對する批評とならざるを得ざる次第である。そしてあらゆる私有制度が農業生産と土地自體の合理的なる取扱と維持と改良とに對して造り爲す所のこの制限と妨礙とは諸所に於て種々の形態に於て發展したのである。そして又更に小農地所有制について見れば、小所有地制は人口の大部分は農村の住民であること、勞働に於ては社會的な勞働が行はれないで孤立的な勞働が主として行はれることを前提とする。又かゝる状態に於ては富と再生産の發展とはその精神的なる條件に於てもその物質的な條件に於ても殆んど除外されて居り、從て合理的なる耕作の條件も除外されて居ることを前提とする。それに他方に於ては、大農地所有制は農業人口をば常に縮小して止まない最小限度まで減少せしめ、之に對立するに、常に増加して休むことなく大都市に向つて集注する工業人口を以てする。之が爲めに、社會的にして然かも生活の自然法則に依て豫定されたる新陳代謝の結合關係中に救治すべからざる龜裂を發生せしむる所の諸條件を産み出す。その結果として土地の生産力は濫費せられ、然かもその濫費は商業に依て自國の國境を越へてまで遙かに遠く持出される次第である。<sup>32)</sup>

小所有地制度が、半ば社會の外に立つ所の野蠻人の階級を造り出し、その階級は未開なる社會形態のあらゆる粗野と開化せる國々のあらゆる苦難とあらゆる貧窮とを結合するものであるなら



ば、大所有地制は勞働力をば、その自然に發生する精力が其所に送り行き又其所ではそれが國民生活力の更新の爲めの豫備基本として自らを蓄積する所の最後の領域即ち農村自身に於て埋葬してしまふものである。大工業と工業的に經營せられる大農業とは共同に働く。そして前者は主として勞働力を、從て人間の自然的な力を、後者は主として直接に土地の自然力を枯渇せしめ荒廢せしむるものであることに依て兩者は根本的に區別さるゝものであるとしても、後には兩者は、工業的な組織が農村に於ても亦勞働者の力を枯死せしめ、工業と商業とは又土地の力を吸盡す爲めに要する手段を農業に造り與へることに依て、互に手を取り合つて進み行くものである。<sup>(10)</sup>

さればマルクスの觀る所では、小所有地制も大所有地制も共に農村を荒廢せしめ、農村人口を減少せしめ、土地の生産力を枯渇せしむる爲めに働くことゝなるものであつて、土地所有制の基礎の上に立つ農業は之と並び行はれる商業及工業と相助けて、人力と地力とを吸盡し枯死せしめなければ止まないものであるが、中に在つても小所有地制の上に立つ自作農業は、文明に後れ經濟界の繼子たる小農民階級を造り、それ等の經濟と境遇とは段々に悪くなつて、その經營は終に不可能に歸し、結局滅亡に赴く外はなき次第である。つまり其運命は殆んど歴史の領域に入らんとするものであつて、將來を有するものとは見られない。そして小自作農民の階級は、半ば社會の外に立つ野蠻人の階級と見られ、その階級は未開社會のあらゆる粗野と開明國のあらゆる苦難

と貧窮とを併せ有する階級だと見られて居ることは、自作的小農民階級としては随分ひどい言葉で痛烈な判決を下されたものと謂はねばならぬ。

## 五

小農民階級が他の小工業者や、商人や利子に依て衣食する小資本主や手工業者やの類と共に、從來の中等階級としての其の地位と獨立とを持ち得ないで相率いてプロレタリアートの階級に没落するといふことは、共産黨宣言にも明示されて居る。<sup>34)</sup> その見地もやはり上に述べて來た所と同様に、農業に於ける資本主義的發展は工業に於けると異つたものとして示すことは出来ないといふ見地であつて、農業に於ても亦大經營が小經營に打勝つものと見られ、小經營は苦み衰へ行くに反して大經營は増し榮えて行くものと見られるのである。即ち資本主義的な進化的行程に於ては大産業は常に有利の地位を占むるもので、それは農業方面の小經營を打破すると同時に合理的なる農業大經營を可能ならしめる。「大産業にして初めてよく機械の使用と共に資本主義的な農業の常住的基礎を供し、農村住民の大多數をば根本的に所有を剝ぎ、農業と家庭的で農村的な工業との分離を完成する」<sup>35)</sup>のである。

家庭的なる工業が大工業の爲めに亡ばされて小農民が其方面からの所得を失つたことは、農民經濟の爲には又一の大いなる打撃たらざるを得ない。蓋し農民は農業からの所得だけでは食つて

84) Das Kommunistische Manifest, siebente autorisierte deutsche Ausgabe, S. 29

35) Das Kapital, I. Bd. I. Aufl. S. 732; IV. Aufl. S. 714; Volksausgabe S. 677ff.

行けないで、家庭的な工業から所得の補充を得て、それで生きて行かなければならない境遇に在るからである。

そして又マルクスの觀る所では、共有地が附近の大地主に依て横領せられたことも、小農民の没落を誘致するに與つて力あるものであつた。蓋し共有地の使用は、到る所で小農業の第二の補充を爲し、これあるが爲めに家畜の飼育を可能ならしめて居たからである。<sup>36)</sup>

租税も亦小農民没落の原因を爲すもの、一つに數へなければならぬ。即ちマルクスの見る所では、前に一言したやうに、高利貸と租税制度とは小農地所有をば到る所で困窮に陥れるものである。<sup>37)</sup>

要するにマルクスは資本主義的經濟の發達の爲めに、小農業は漸次壓迫せられて衰亡に傾き、小農業者は「資本主義的に經營せられる農業の爲に壓迫せられて、賃傭労働者の階級に常に新たなる新兵を供給する」ものである。<sup>38)</sup>そして小農經營は減少して行く。其實例は之を事實に徴するも明かである。<sup>39)</sup>そして資本的集積は同時に貧困の集積を意味する。

マルクスは大體以上の如く觀るものであるが、此の見地即ち資本主義的な集中は現時の經濟に於ける一般的傾向として表はれ、農業に於ても亦工業に於けると同様で、兩者間に大體の傾向

36) III. Bd. II. Theil, S. 341

37) ebenda

38) ebenda

39) I. Bd. S. 695 (I. Aufl.); S. 671 (IV. Aufl.); S. 637ff. (Volksausgabe)

40) I. Bd. S. 637 (I. Aufl.); S. 611 (IV. Aufl.); S. 587 (Volksausg.) 參照

に關する根本的相違の認むべきものなく、從て農業に在つても工業に於けるが如く資本的なる大經營は常に小經營に對して優越の地位を占め、後者は漸次前者の壓迫の爲めに衰亡に向ひ、小農地所有は失はれ小農的自作農民はその經濟上の獨立を失つて賃勞働者の階級に陥らざるを得ず、之が爲めに無産階級は益々膨脹して其人々の境遇は貧困に迫らざるを得ないを見る見地に對しては、理論と實際とから之を駁撃して居る人が少くない。就中 Ed. Bernstein (Die Voraussetzungen des Sozialismus) や Ed. David (Sozialismus und Landwirtschaft) は著名である。特に Ed. David の茲に掲ぐる著書は、此點に關するマルクスの見地の誤を正さん爲に書かれたりと謂て差支なきほどで、其所論は詳細に涉つて居る。之については私は曩に其一端を紹介して置いた。<sup>41)</sup> 又私が本文に援用した Dr. Constaed の著書中にも色々反駁論が試みられて居る。<sup>42)</sup> 然し茲には私は反對論をまで述べん爲に本論を草するのではなく、たゞ有の儘にマルクスの農業經濟觀を傳へてみたいのであるから、それ等の反對論はすべて之を顧みないと同時に私自身としての批評を加へることも差控へて置く。

尙ほ附記しなければならぬことは、マルクスは農業内部に於て非資本主義的なる小自作農業は資本的なる大農業の競争の爲に壓倒されてしまふと見るばかりでなく、その資本的なる大農業も

41) 中央論(大正十五年)第四十一年第九號拙稿「農業と社會主義」

42) op. cit. S. 60 fg.

亦弱點を有し結局衰亡に歸する外はないと信することこれである。その衰亡しなければならぬ理由としては、資本主義的社會に於ける不可避の事實として都會と田舎との分離の結果人間と土地との間の代謝作用の紊されざるを得ることが考へられて居る。即ち人間が食料や衣料の形に於て用ゐたる土地の素成分が再び土地に返されることなきに至り、それが爲めに土地の沃度を維持すべき永久的な自然條件が失はれるに至るからである。<sup>43)</sup>この見地はリービッヒの所説に基いて居ると思はれるのであつて、リービッヒは農業化學の立場から土地の沃度の維持に關する研究を試み、人口が都會に集中して土地の素成分の新陳代謝を爲すべき多くの農産物を消費して其廢物や排泄物を農地に返し與へざることゝなるに連れて農地は其沃度を減せざるを得ないと説いて居るのである。マルクスの所見によれば此の代謝作用の缺乏からして小自作農的な經營も資本主義的な大經營も共に土地の生産力を吸取つてしまひ地力を枯渇せしむることゝならざるを得ざるものと信じて居る。即ち資本主義的農業に於ける進歩は地力を掠奪する技術に於ける進歩であり、一定期間に對して土地の生産力を増さしむることに於ける進歩は同時にその生産力の永久的なる源となるものを枯渇せしむるについての進歩たるに外ならぬと觀て居るのである。

斯くて生産の資本主義的な組織は、土地の合目的な加工と利用とを追々に妨げることゝなり、「其の發達が一定程度の階段まで上ばり行けば社會の物質的な生産力は、現存の生産關係

43) I. Bd. I. Aufl. S. 494 (IV. Aufl. S. 470; Volksausgabe S. 445); III. Bd. II. Theil, S. 347

と撞着するに至る。法律的な云表はしで之を換言すれば、從來その範圍内に於て生産力の活動して居た所有關係と矛盾するに至るものである。此の關係は生産力の進化の形式からして急にその桎梏に變化するものである。<sup>44)</sup>即ち所有關係は初の中は生産力進化の形式を爲して居るが或時期に達すれば却つて其束縛となるに至るものである。そしてこの進化の過程は工業的な生産に於ても農業的な生産に於ても聊かの相違も存せず、兩方面に對し同一様に資本主義的原則が妥當するものである。「資本獨占はその支配と共に又その支配下に繁榮する生産方法の桎梏となる。生産手段の集中と勞働の社會化とは、其資本主義的な皮殻と兩立し難い或點に到達するものである。皮殻は打壞される。資本主義的な私有制の最後の日は来る。掠奪者は却つて掠奪せられることになる。」<sup>45)</sup>そして生産手段が斯くの如くにして私有制の桎梏から解放せらるれば、それは社會の所有に移されることになる。

さればマルクスの觀る所では、小農業にせよ大農業にせよ、苟も土地其他一般的に生産要具の私有制の下に於て其の生産が行はれる限りは、それが發達して一定の階段まで進み行けば、生産力の發達と之れを容れて居る所有制といふ社會的組織とが調和し難きに至つて、其の組織は當然に破壊せざるを得ざることとなる。即ち土地私有制は到底よく農業生産力と調和し得ざることとなり、内部に於ける生産力といふ力の膨脹の爲めに所有制といふ容皮は張り裂けてしまはざるを得

- 44) Zur Kritik der Politischen Oekonomie, 2. Aufl. Stuttgart 1907 Vorwort S. LV.  
45) Das Kapital. I. Bd. S. 744 (I. Aufl.) od. S. 738 (IV. Aufl.) od. S. 691 (Volksausgabe)

なくなる。かるが故に初は小農的自作制が衰亡するが、次にはその衰亡を餘儀なからしめたる資本的大農業も亦自己内部の矛盾からして自らに衰滅せざるを得ざるに至る。つまりは資本主義的な私的所有制と社會的生産力との撞着の爲に私的所有制は亡滅に歸せざるべからざることとなる一般法則が妥當する次第である。私有制の上に立脚する農業の運命は商工業も皆同様に早晚末期の日を見ざるを得ざるものと考へられるのである。そしてそれが一般的法則たるが故に然りと觀られる點は、マルクスの見地を叩く者に取つては、特に注意を要する所であらねばならぬ。

(未完)